

般若心経秘鍵 上表文 現代語訳

時は弘仁九年（八一八）の春、全国的に疫病が大流行しました。そこで帝（嵯峨天皇）は、自ら金泥を筆の先に染め、紺色の紙を掌に握られて、『般若心経』一卷を書写せられました。私（空海）は、『心経』を講義した著作を手本にして、そのお経の主旨を書きました。ところが、いまだ結論の言葉を述べないうちに、疫病から蘇った人々が、道路にたたずんでいるではありませんか。まるで夜中に日光が赤々と輝くかのような靈験です。これは愚僧（空海）の戒律の功德ではなく、金輪聖王とも称すべき天皇陛下の御信仰の力によるものであります。ただし、神社に参詣する方々は、この『秘鍵』を読誦なさって下さい。その昔、私は、鷲峯山で釈尊の御説法の座に待り、親しくこの『心経』の深秘な文意を聴聞しましたので、どうしてその奥義に通達しないことがありませんようや。入唐した沙門空海が上表します